北朝鮮で新型コロナ「感染爆発」　核・ミサイル、それでも挑発?

毎日新聞 2022/5/18

北朝鮮の首都・平壌の「防疫危機制圧」のため、朝鮮人民軍の軍医部門と国防省が開いた決意集会。後ろの赤い看板には「金正恩同志さえいれば、いつも必ず勝つ！」と書かれている＝2022年5月16日、朝鮮中央通信・朝鮮通信

5 月 12 日に初めて新型コロナウイルスの国内流入を認めた北朝鮮が、感染爆発の対応に追われている。ロックダウン（都市封鎖）を徹底するものの、住民のほとんどはワクチン未接種で、医薬品不足も深刻だ。金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党総書記が自ら認めた「建国以来の大動乱」は、収束の兆しが見えない。【ソウル坂口裕彦、渋江千春】

死者を下方修正?　経済疲弊でジレンマ

陣頭指揮にあたる金総書記は 15 日、首都・平壌市内の薬局に、マスクを二重に着用して登場した。解熱剤などの在庫や価格を直接ただして「薬局がきちんと機能していない」と叱責。「人民の安全と安寧に全責任を持つという心構えで、任務に当たらなければならない」と指示した。

発言からにじむのは、医薬品の不足に対する強い危機感だ。金総書記や幹部までが、家庭の常備薬を提供する状況に追い込まれている。韓国の聯合ニュースは、高麗航空の航空機 3 機が 16 日午前、中国・遼寧省の瀋陽空港で医薬品を積み込み、同日午後に北朝鮮に戻ったと報じた。北朝鮮の国営メディアは、薬物の不適切な使用による死者が大半を占めていると報道。市民の不安を払拭（ふっしょく）するための必死の対応が続いている。

国営の朝鮮中央通信によると、18 日午後 6 時までの累計発熱者数は全人口（約 2588 万人）の 7・6%にあたる 197 万 8000 人余り。死者は 63 人になった。致死率は約 0・003%だ。医療水準が高く、国民の 9 割近くが 2 回のワクチン接種を終えている韓国ですら致死率は約 0・13%。北朝鮮の死者数は、大幅に下方修正されている可能性が高い。聯合ニュースは、韓国情報当局が「実際の死者数は当局の発表より 5～6 倍は多い」と推定していると報じた。

北朝鮮は 2020 年 1 月末から国境を封鎖するという徹底した政策で新型コロナの流入防止に挑み、今月 12 日に流入を認めるまでは「感染者は一人も発生していない」と主張していた。今回、方針転換して感染拡大を認めたのは、住民と危機意識を共有しないと対応でき

ないほど状況が悪くなったからとみられる。

世界的に流行する新型コロナのオミクロン株は、比較的毒性が低いこともあり、防疫当局の警戒も緩んでいた模様だ。12 日の党中央委員会政治局会議では、防疫部門の「無警戒と気の緩み、無責任と無能」が厳しく批判された。

金総書記は、都市封鎖を行って新型コロナの抑え込みを図る中国の対応を「先進的な防疫成果」と位置づける。当面はその手法を模倣し、都市封鎖による厳しい移動制限を徹底するとみられる。だが、全住民に対するワクチン接種を進めない限り、根本的な解決にはならない。移動制限や中朝国境の貨物列車の運行停止が長期化するほど、長きにわたる制裁で疲弊した経済がさらなる打撃を受けるというジレンマも抱える。

韓国統一相「核実験の時期に影響も」

北朝鮮での新型コロナの急速な感染拡大は、準備を加速させてきた大陸間弾道ミサイル（ICBM）発射や 7 回目の核実験の実施日程に影響を与えるのか。韓国で論議を呼んでいる。

「金総書記自らが大動乱と表現するほど大きな事件だ。核実験にも影響を与えかねないと慎重に予測している」。韓国の権寧世（クォン・ヨンセ）統一相は 17 日の国会で、北朝鮮がコロナ対応に忙殺されているとの見方を示した。

韓国政府は、北朝鮮が 3 月ごろから準備を加速させていた北東部の豊渓里（プンゲリ）の核実験場について「準備が完了している」と分析。金総書記の決断次第で、今月中にも核実験に踏み切ると見ていた。

その予測の「変数」となったのが新型コロナの感染爆発だった。北朝鮮では、金総書記が「党と人民の一心団結に基づく強い組織力と統制力を維持した防疫闘争強化」を自ら宣言。党中央軍事委員会は平壌に朝鮮人民軍を投入する特別命令を出し、軍が 24 時間体制で医薬品の供給・輸送を担うようになった。

16 日に国営の朝鮮中央通信が配信した写真によると、朝鮮人民軍の軍医部門と国防省は、平壌の「防疫危機制圧」を目指し決意集会を開催。赤い看板には「金正恩同志さえいれば、いつも必ず勝つ！」とスローガンが書かれていた。国を挙げての「総力戦」となっていることがうかがえる。

皮肉にも、感染爆発の引き金になったとみられるのは、核・ミサイル能力を誇示した 4 月 25 日の軍事パレードだ。歴代最大規模のパレードには約 2 万人が動員されたが、参加者は誰もマスクをしていなかった。さらに金総書記はパレード終了後、数日間かけて兵士や学生らと記念撮影を行うなど、人心掌握に利用。学生との写真撮影では 1000 人以上が、マスクをせずに整列した状態で密着していた。

軍を動員して感染拡大の「制圧」にあたる背景には、金総書記の執権 10 年の節目に行った一連の国威発揚の行事に批判の矛先が向かわないよう、先手を打っている可能性がある。

世宗研究所の鄭成長（チョン・ソンジャン）北朝鮮研究センター長は「このまま核実験などを強行し、国際社会の支援を拒否した場合、死亡者の急増と経済破綻で、金正恩体制は最大の危機に直面することになる」と指摘する。

一方、北朝鮮は「自力更生」路線を崩しておらず、感染拡大は ICBM 発射や核実験などの軍事的挑発のブレーキにはならないとの見方もある。実際、韓国の尹錫悦（ユン・ソンニョル）大統領が北朝鮮への医療支援を表明し、米国も支持したが、韓国統一省が 16 日から医療支援の提供を呼びかけても、北朝鮮からの回答はないままだ。

北朝鮮は新型コロナの感染者が初めて国内で確認されたと認めた 12 日も短距離弾道ミサイル 3 発を発射した。米シンクタンク「戦略国際問題研究所」は 17 日の衛星写真から豊渓里の核実験場で引き続き動きがあると分析。韓国軍の関係者は「北朝鮮が ICBM 発射や核実験を行う可能性が常にあると想定して備えている」と語った。